

「命」とは一本の線路

(原文)

和田 璃紅 (12 歳)

静岡県

不二聖心女子学院中学校

「命」というものは、肌の色が違う人も、言語が異なっている人も、お金持ちの人も、毎日の生活に苦しんでいる人も、世界中のどんな人、どんな生き物にも必ず神様が一人ひとりに授けてくれたものです。私はこの「命」というものを、それぞれが「人生」という名の電車に乗るための「チケット」だと考えます。生まれたときはみんな赤ちゃんでこの電車に乗り、そこからそれぞれ違う終着駅＝生きる目的にたどり着くために、いくつかの停車駅＝目標に寄りながら生きていくからです。

私にとっての終着駅は、心に響くような授業ができる教師になることです。そのために、私は今まで 2 つの駅に立ち寄りました。1 つ目は、「自分に合った勉強法を身に付けよう駅」です。この駅では、教科書などにある教材をじっくり深く読んで感じ、自分自身に訴えかけるように勉強しました。私はこの勉強方法で、自分の納得する理解ができるようになったと思います。この「自分に合った勉強法を身に付けよう駅」は、これからも私の線路の先に何回も現れることと思います。もう一つの駅は、「不二聖心女子学院入学駅」です。この駅にたどり着いたときは、これからの希望や自分への期待が見え、自分の「生きる目的」に少し近づいた気がしました。そして「命」を大切に使用していることを自分なりに実感しました。

しかし、自分の決めた目的や目標に向かって命を使える人ばかりではありません。私が 2 歳のとき、東日本大震災が起こりました。当時は幼かったので実感はありませんでしたが、小学校 6 年生の時に、詳しく調べました。自分の家族を助けようとして亡くなった人、逃げ遅れて亡くなった人がたくさんいたことを知りました。不本意な形で亡くなった方々のことを考えると、「3 月 11 日 14 時 26 分」は、毎年とても苦しくなります。将来に希望を持って、人生の電車旅を楽しんで生きていた方々がたくさんいただろうと思うと、自分の命のありがたさを感じずにはられません。

しかしながら現在は、そのように予期しない死ではない形で命が途絶えてしまう人もいます。「自ら命を絶ってしまう人」です。人生の電車のチケットを手放すことを自ら選んだ人の気持ちはどのようなものだったのでしょうか。その人は、とても辛いことがあって、誰にも相談できず、思い詰めて自分だけで決めてしまったのではないかと思うのです。でも、そこで自分の命のチケットを手放すことは、その先の未来に待っている可能性を自ら手放すこととなります。だから。そんなときに、電車の線路のように隣で一緒に走ってくれる人がいるといいなと思います。ずっと一緒になくても構いません、近づ

きすぎることなく、いつか並んで走ってくれるだけでも安心を感じられ、また次の駅まで頑張ろうという気持ちになれると思います。誰かがつらいとき、私はそんなふうに隣で走れる人になりたいなと思います。それに、私自身、一人でもただ淡々と終着駅に向かって電車を走らせるより、誰かと支え合って走れたら楽しくて幸せだと思います。

隣で支え合いながら走ることは他の線路でも大切なことです。「貧困をなくそう」「ジェンダー平等を実現しよう」「人や国の不平等をなくそう」「平和と公正をすべての人に」とSDGsの目標にあるように、戦争や貧困によって命を奪われる人、性別や趣味などで差別され命を絶つ人がいない世の中を作るために、自分の持っているチケットを自分のためだけに使うのではなく、惜しみなく人のためにも使えるようにして行きたいです。

一人一人に渡される「命」というチケットはその人のもので、誰とも交換できないかけがえのないものです。けれど、そのチケットをいろんな人と共有し、認め合う。それが自分や周囲とのつながりを作り、「命を守る」ことにつながるのではないかと私は思います